



説教要旨 「神様の扶養家族」

ルカによる福音書 11章5～13節

イエス様はここで、友人の家を真夜中に訪ねて、「パンを三つ貸してください」と願う。というたとえ話をされました。相手にしてみれば、真夜中に訪ねて来られることは迷惑ですから、たとえ友人の頼みでも断られるだろう、しかし、「しつように頼めば、起きてきて必要なものを与えてくれるだろう。」(8節) と言うのです。

この友人の姿は、「悪い者」(13節)である私たちの姿です。しつこくてやかましいから、これ以上迷惑をかけられたくないから、という理由で、ようやく重い腰をあげて、友人の願いに応えるような私たちです。しかし天の父は、私たちのように嫌々ながらでなく、喜んで、子である私たちに良い物を与えて下さるのです。

「だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」(10節) という言葉は、私たちが祈り求めるものは何でもその通りに適えられる、という約束ではありません。そう理解したならば、私たちは必ず失望します。なぜなら神様は、私たちの願望を、すべて私たちが願ったとおりに、実現させてくださるわけではないからです。このみ言葉は、神様が私たちの父となって下さり、私たちが子どもとして愛し、父が子に必要なものを与え、養うように、私たちが育てて下さるという約束を語っているのです。

私たちも、親は子どもが求めるものをできるだけ与えようとするでしょう。しかしそれは、何でも子どもの言いなりになる、ということではないはずです。子どもを本当に愛している親であれば、子の成長を願い、その子に必要なものを必要な時に与えようとし、子が何かを求めても、今は与えるべきでないと判断すれば、我慢させるでしょう。たとえその子に恨まれたとしても。本当に子どもを愛しているからこそ、子どもの願いを退けることもあるのです。私たち人間の親子関係においてさえ、そうであるのです。天におられる私たちの父なる神様は、私たちに本当に必要なものを、必要な時に与えて下さるお方なのです。

(2019・5・12 説教者：稲垣真実)